

海のあなたの遙けき南

上田敏と近代プロヴァンス文学

石塚 出穂

序

明治 28 年 (1895 年) 5 月、この年創刊されたばかりの『帝國文學』第 5 号の「海外騷壇」欄で、ある詩人の死が報じられた。

詩人の逝きし者二人あり。一はプロヴァンスの詩人アンセルム、マチウ Anselme Mathieu といふ。年を享くる七十冬、去る二月上旬氷上に滑りて足を傷け、終に病を醸して帝郷に向ひぬ。華麗奔放一代の詩風を作して接吻詩家の名さへありし人なり。詩社を組みしもの初め七星、漸次、光を収めて今や微に二星を残す而已 (のみ) ¹。

実にあざやかな筆致で綴られた文章であるが、詩人の訃報にしては作品への言及が一切なく、彼が参加していたという詩社に関しても特に解説のないのがやや奇妙である。続いて紹介されているギリシャの詩人については、「概世憂國の詩多く往々勇健の調あるを以て國民詩人として尊敬せられた」と解説した上で、具体的な作品名が提示されているところを見ると、必ずしも紙幅の制限による省略ではないらしい。おそらく「訃音」の書き手は、マチウに関しては実際あまり知識がなかったのだろう。

明治 20 年代といえば、フランス文学の翻訳・紹介がようやく軌道に乗り始めた時期であるが、まだまだ情報量は少なく、英訳であれなんであれ、作品を入手することのできる作家も限られていた。そのような時代であるから、偶然名前を目にしただけの未知の作家であっても、とにかく紹介することに意義があったに違いない。種々雑多な情報が、あまり細かな選別のふるいにかかけられることなく、ひとつひとつ強い関心を持って受止められた、おおら

¹ 『帝國文學』第 1 卷第 5 号、明治 28 年 5 月、「海外騷壇」欄内「訃音」、103 頁。無記名。マチウと共に取り上げられているもう一人の詩人は「希臘新邦の詩人アヒレフス、パラスホス」である。

かなよき時代であったといえよう。

このような時代に訪れたアンセルム・マチウの死は、詩人本人にとってはこの世との別れであったが、日本にとっては近代プロヴァンス文学との出会いとなった。そして、おそらくはマチウの作品をまったく知らないままその訃報を書いた人物は、やがて最初のプロヴァンス文学翻訳者となり、後々の研究の基礎を作ることになる。その人物とは、今も『海潮音』の著者として名を残す文学者、上田敏である。

1

上田敏(1874-1916)が、専門の英文学以外にも幅広く西欧文学の紹介を行ったことはよく知られているが、その活動は早くも東京大学英文科在学中の1890年代半ばに、『帝國文學』誌上で開始されていた。冒頭で引用したプロヴァンスの詩人アンセルム・マチウの訃報は、その中でも初期に属する紹介記事の一つであるが、この「訃音」が載った第5号には、「佛文壇の消息」という題で、上田がフランス文学に関して書いた最初のまとまった評論も発表されている。

「消息」はまず「バルザック、ジオルヂ、サン、フロオベル此三人は吾人が佛蘭西の三大小説家と仰く所なり²」と一世代前の大家を簡潔に評価した上で、直ちに本題である現役作家に関する論評へと移っている。すでに相当程度近代フランスの文学作品を読み込み、更に現文壇の動向にも十分通じているという、若き学徒の矜持を窺わせる文章である。ほんの数ページの短い記事の中に、4年前にゾラとアカデミーの椅子を争ったロティの近況あり、この年3月に出版されたドーデの新作についての書評あり、また演劇界に革新をもたらしたアントワヌの「自由座」が創立8年目にして存続の危機かという報告ありと様々な情報が詰め込まれており、書き手がまだ21歳の学生であることを考えると、相当に充実した通信といえる。

この評論と同時に掲載されたマチウの記事も、やはり同時代の作家の動静を伝えたものであり、その意味では仏文学紹介の取組みの一環とみえる。ただし「消息」で扱われていた作家の多くが当時のパリ文壇の主要人物であったのに対して、マチウはアカデミー会員であったとも、文壇の重鎮であったとも書かれていない。では、彼はどのような理由で「訃音」に取り上げられ

² 同書、「海外騒壇」欄内「佛文壇の消息」、94頁。「ジオルヂ、サン」はジョルジュ・サンドのことであろう。原文では、傍線部以外は傍点あり。

たのだろうか。

アンセルム・マチウ（1829-1895）は、仏文学史でも取り上げられていないことが多いが、19世紀に起こった南仏文学復興運動に尽力したプロヴァンス語詩人の一人である。この文学復興運動は、中世のトルバドールまで遡る伝統あるプロヴァンス文学を再興しようと始められたもので、特にフレデリック・ミストラル（1830-1914）やテオドール・オーバネル（1829-1886）を中心とする7人の詩人が1854年に結成したフェリブリージュという文学団体によって強力に推進された³。マチウはミストラルの学校時代からの友人で、彼とともに詩社の設立に参加した。

しかしミストラルが叙事詩『ミレイユ』（1859）で世に認められた後、常に第一線で活躍し続けたのに対して、マチウは1862年に詩集『ファランドール』を出版した後は、新聞・雑誌に詩やコントを発表するに止まり、フェリブリージュの中でも比較的地味な存在であった。1895年2月にマチウが世を去ったとき、旧友ミストラルは『アイオリ』紙に追悼記事を書いたが、その冒頭、「陽光の中を飛び回る小虫のように」軽やかな詩を書いたこの“接吻の詩人”の死がほとんど話題とならなかったことを嘆いている。

プロヴァンス語の大詩人の一人であったあのアンセルム・マチウが、8日前に彼の村で世を去ったが、諸新聞は蝶々が一匹死んだほどにしか騒がなかった！マチウはフェリブリージュを創った7人のうちの1人であった——そして今や残ったのは2人だけになってしまった⁴。

この記事を読むならば、マチウの死はフランス本国でさえ人々の注意を引くニュースではなかったわけだが、たとえ彼自身の活動は地味であっても、フェリブリージュの創立者の一人としての資格において、やはりいくらかの反響は呼んだ。訃報は国外にも伝わり、たとえばイギリスの週刊文芸誌『アシニウム』の「文芸漫筆」欄にも次のような短信が掲載された。

³ 南仏文学復興運動フェリブリージュ *Felibrige* (Félibrige) (イタリアックはプロヴァンス語表記) は、1854年に7人の詩人によって設立された後、次第に賛同者の数を増やして、言語学者・歴史家・作曲家など各方面の知識人を含む一大組織に発展。現在も活動を続けている。フェリブリージュの同人は、普通「フェリーブル *felibre* (félibre)」と呼ばれるが、設立者たる7人の詩人など最初期の同人たちについては特に「初期同人 *primadié*」と呼んで、他のフェリーブルと区別することがある。

⁴ *L'Aiòli*, N° 149, lou 17 de febrüé 1895. マチウが死亡したのは2月8日。この時点で残った2人の初期同人とは、アルフォンス・タヴァン（1833-1905）とミストラルである。『アイオリ』紙は、ミストラルが1891年に創刊したプロヴァンス語の旬刊紙。

フェリブリージュの7人の創立者の1人であり、『ファランドール』の作者であるアンセルム・マチウ氏が、氷上での転倒の結果アヴィニョンで死亡、享年70歳⁵。

この記事の後半部は、上田敏の「年を享くる七十冬、去る二月上旬氷上に滑りて」という記述とほぼ重なっている。ただし「詩社を組みしもの初め七星、漸次、光を収めて今や微に二星を残す而已」に該当する文章はないので、これが上田の直接の情報源かどうかは微妙であるが、おそらく同様の内容を伝える記事が他にもあったのだろう⁶。しかしいづれにせよ、さして派手な扱いをされていたとは思えないので、多くの記事の中からマチウの訃報を選び出した上田には、この詩人に関するなんらかの予備知識があったのではないかと推測される。

そこで考えられる可能性のひとつは、「訃音」のもとになった記事を読む前から、上田敏がマチウの名に接する機会があったということである。実は上田ばかりではなく、明治20年代の日本においては、今よりはるかに多くの人々がマチウの名を目にしていたはずなのである。なぜならその頃、同時代の文人との交流や自作執筆の経緯などを綴ったアルフォンス・ドーデの回想録『巴里の三十年⁷』（1888）が、一種の仏文学入門の手引書として文学青年たちの間で大変よく読まれていたのだが、この本の中にドーデの友人の一人としてマチウも実名で登場しているからである。

上田敏は同時代のフランス「写実派」の中ではドーデを特に好んで高く評価しており、長編小説のほとんどを読破していた。はじめこそ英訳で読んでいたが、後に大学院で師事したラファエル・ケーベル（1848-1923）からフランス語の原書を借りて読み直したといい、その熱烈な愛好振りは「消息」中の書評にもよく現れている。

…近時現存の諸名家中時々物議を醸して毀譽褒貶の衝に當る者は常に寫実派の泰斗エミール・ゾラなれども、寫す所深く人世の恨事を穿ち、其著作に温藉渾雅なる同情の籠れるに至りては、アルフォンス、ドオデエの小説を優れりとす。

⁵ “Literary Gossip”, *The Athenaeum*, N° 3513, February 23 1895, p. 252.

⁶ 「今や微に二星」の部分はむしろミストラルの文章に似ている。『アイオリ』の追悼文をもとにした仏語あるいは英語の記事があった可能性も考えられる。

⁷ Alphonse Daudet, *Trente ans de Paris, à travers ma vie et mes livres*, Paris, C. Marpon et E. Flammarion, 1888. 上田敏とほぼ同世代で交流もあった田山花袋（1871-1930）が後に著した回想録『東京の三十年』（1917）は、ドーデのこの表題をもじったものと言われている。こんなところにも当時の人気を窺うことができる。

悲哀極まりなくして鐵石の人をも動すは『ジャック』の物語に若くはなく『ナバップ』の幽麗にして悲哀歡樂の間をたどるは宛も五月雨の空晴れて葵の花の艶なるに驚く如し。其他『王家流竄録』の篇に妖艶なる美女の姿を畫きて深く讀者の心を動かす等英米小説家輩の到底企及すべきものならず⁸。

あくまでも印象批評ではあるが、相当な賛辞を連ねてある。これほど熱心に作品を読み込んでいた作家であるから、回想録にも目を通してあるのは当然であろう。問題はその時期ということになるが、これについては明治 26 年頃ドーデを読み始めたという馬場孤蝶 (1869-1940) が、『巴里の三十年』を上田から借りて読んだと書いており⁹、その頃には原書あるいは英訳版を自分で所有もしていたらしいことが分る。よって上田敏が「訃音」を書く以前にこの回想録を読んでいたのはほぼ確実と考えられる。

さて、この『巴里の三十年』に「我が書の来歴：『風車小屋便り』」と題された一章がある。ここでドーデは『風車小屋便り』を書いた若き日を振り返り、物語の舞台のモデルとなった古ぼけた風車について、またその風車の近くに住んでいた彼と親しい南仏人一家について語り、さらに彼がその頃好んで行動を共にしたプロヴァンスの詩人たちの思い出を綴っているが、そうした作家仲間の一人として、アンセルム・マチウも登場しているのである。

ドーデは自分も南仏ニームの出身であるため、早くからフェリブリージュに関心を寄せ、「プロヴァンスの七星詩派¹⁰」(1860) という記事でその活動を紹介するなど、彼等と積極的に関わった。なかでもミストラルとは特に堅い友情で結ばれていたが、他の同人たちとも親しく交流しており、「我が書の来歴：『風車小屋便り』」でもテオドール・オーパネル、ジョゼフ・ルマニーユ (1818-1891) 等、フェリブリージュの代表的詩人の名が挙げられている。そしてマチウはプロヴァンスで最も名高いワインの産地であるシャトーヌフ＝デ＝パップの詩人として紹介されている。

船乗りの集まる酒場かどこかで食事をした後、私達はよくシャトーヌフ＝デ＝パップに住む詩人アンセルム・マチウの家へ行った。ここは長い間プロヴァン

⁸ 「佛壇壇の消息」、94-95 頁。原文では、最後の一文以外は傍点が付されている。

⁹ 馬場孤蝶「初めて大陸文學に接した時分」、『文章世界』第 5 卷第 5 号、明治 43 年 4 月、104 頁、及び「購書の追想」、『趣味』第 4 卷第 3 号、明治 42 年 3 月、6 頁。『巴里の三十年』の英訳はまず原書と同じく 1888 年に出版され、1893 年に再刊されている。

¹⁰ “La Pléiade provençale”, *Le Monde illustré*, sept. 1860. 上田敏の文章に「詩社を組みしもの初め七星」とあったのは、彼の参照した記事がこのドーデの記事と同様、Pléiade に類する表現を用いていたためかもしれない。

スで最も評判の高かった葡萄で有名な土地である。ああ！法王のワイン、金色を帯びた、王侯の、皇帝の、教皇のワイン、それを私達は葡萄畑の広がる丘の上で飲んだものだった。ミストラルの詩を、『黄金の島々』の新しい数節を歌いながら…¹¹。

この他にあと一箇所、陽気な詩人たちが『ミレイユ』の詩節や、オーバネルの『アルルのヴィーナス』、アンセルム・マチウヤルマニーユの物語などを香具師の口上よろしく振り撒いて大騒ぎをした、という件にマチウの名が見られるが、ミストラルやオーバネルの場合と違って具体的な作品名も挙げられておらず、よほど丹念に読み込まない限り、見落としてしまいそうである。しかし、はっきりと記憶してはいなくとも、どこかで見た覚えがあるという程度の漠然とした印象は残ったことだろう。しかも余人なら知らず、上田敏のような旺盛な知識欲の持ち主ならば、自分が愛好する作家に関係のある名は相当程度注意して眺めたに違いない。

上田がマチウの訃報に注意をひかれた理由として考えられることは、この他にもある。それは“プロヴァンスの詩人”という肩書きである。プロヴァンスは現存するフランスの一地方であるが、その一方で時代を超えた文学的空間、中世にトルバドゥールたちが活躍した文学史上の詩の王国でもある。ミストラルやマチウが起したフェリブリージュの運動も、由緒あるプロヴァンス文学の後継者としての自覚から始まっていたわけだが、まさにそうした伝統ある土地の詩人としてのマチウに上田は着目したのではなかろうか。

「訃音」と同じ1895年の10月、上田敏は彼のライフワークの一つであったダンテ研究の最初の論文「ダンテ、アリギエリ」（『文學界』）を発表している。ここではダンテ以前のイタリア文学が4期に分けて解説してあるが、その中にトルバドゥールの抒情詩等プロヴァンス文学への言及がある。

ダンテ以前の伊太利文学は四期に別つことを得可し。第一期は羅甸（ラテン）語を用ゐたる中世文学。第二期は佛蘭西プロヴンス文学の世にしてシャンソン、ド、ジェスト、カロリゲン王朝の傳説、アルツル王の叙事詩、又南佛蘭西トルバツルの抒情詩大に流行したり。第三期はバレルモの華かなる宮廷に行はれしシチリヤ朝の文学にして、東邦亞刺比亞（アラビア）の文明を混じ、葡萄樹

¹¹ “Histoire de mes livres : *Lettres de mon moulin*”, *Œuvres d'Alphonse Daudet*, t. I, Editions Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1986, p. 409-410. 『黄金の島々 *Lis Isclo d'Or* (*Les Iles d'or*)』は1875年に出版されたミストラルの抒情詩集。

のほひたかきプロヴンスの抒情詩の餘風を享けたるものなり¹²。

この他にもダンテの『俗語論』から三種の「ロマアニッシュ語」の説明を引き、「然りといふ言語を異にするを以て區別することを得るものにしてプロヴンスにオックといひ、佛蘭西にオイルといひ、伊太利亞にシイといふ¹³」とプロヴァンス語の存在に触れている。プロヴァンスの言語・文学といっても、この場合には中世の話であるが、そうした過去とつながる文化が現存するとすれば、古典の愛好家が興味を持つのは当然といえよう。上田敏が正確にはいつ頃からダンテ研究を志していたのか定かではないが、マチウの訃報を書いた5月の時点で、すでにかかなりの関心を寄せていたことは十分考えられる。

以上見てきたように、近代プロヴァンス文学についての日本で最初の記事であるマチウの「訃音」が、上田敏の筆によって『帝國文學』誌上に掲げられる契機となったのは、当時彼が親しんでいたドーデの回想録『巴里の三十年』に見られるマチウに関する記述、そしてやはりその頃彼が抱いていたダンテへの関心に由来するプロヴァンス文学への興味、主としてこの2つではないかと推測される。

2

この後しばらく19世紀のプロヴァンス文学についての報道は途絶えるが、中世のそれについては翌1896年、再び上田敏が「南歐詩話」（『世界之日本』、1896年10月）と題したダンテ論中で触れ、また1897年には上田の東大英文科の後輩である戸川秋骨（1870-1939）が「プロヴァンスの戀歌」（『文學界』、1897年3月）というかなりまとまった紹介文を書いている。こちらも『神曲』に題を取ったロセッティの絵から話を始めて、ダンテやペトラルカとプロヴァンスとの関連を述べているが、さらに一步進んでプロヴァンスやその言語の現況にも言及しているところが注目される。

たとえば「今のプロヴァンスは佛蘭西の南部伊太利に近き處にして、佛蘭西にて南と云へは殊に其の生粹と稱せらるゝ事なれば、風習頗る輕快洒脱なる地方なり。然れども其の昔の言語の上にてのプロヴァンスと云ふは更

¹² 上田敏「ダンテ、アリギエリ」、『文學界』第34号、明治28年10月、6頁。

¹³ 同上、7頁。

らに廣漠なるものなりし¹⁴」とその地理上の位置を論じた箇所もそうだが、南仏語の歴史を語った箇所はより興味深い。ラテン語起源の諸言語の中で先に先じて発達し、みごとに文学を花開かせたオック語が、政治的な事情で衰退したという件である。

オイルの語は佛蘭西の北部に用ひられしものにして、一轉してウイ oui なる然定語を用ふる今日の佛蘭西語となりしものなり、シの語は則ち今日の伊太利語となりしものなり。獨りオックの語は政治上國境の分合に伴はれ、終に佛蘭西語の内に同化せられて、今は其の跡を止めざるに至れり¹⁵。

国境線が言語の運命を左右するというのは現代にも通じる問題であるが、この問題自体には深入りすることなく、戸川は中世文学に立ち戻る。かつてのプロヴァンスの文学は実に「近代歐洲文學の先驅」であり、全ヨーロッパが「殆んど未開の姿」であった時代に、思想においても韻律においても傑出していた。その影響はやがて欧州全土に及び、特に地理的に近いイタリアにおいて顕著に認められることになった。しかし不幸にしてこの華やかな文学も短命で、13世紀には「永く其の跡を斷つに至」った、と今一度南仏文化の運命のはかなさを強調して、戸川は論文を結んでいる。

確かにトルバドゥールの文化は滅びたが、南仏の言語は必ずしも完全にフランス語に同化されて消滅したわけではなかった。戸川秋骨の論文が発表されたのと同じ1897年の3月、雑誌『國民之友』に「我が書の来歴：『風車小屋便り』」が「ドーデーの逸事 其六 風車小屋」の題で記載された。マチウやミストラルの登場する後半部は完全に省略されているが、訳出された前半部に、プロヴァンスに住む友人一家を訪ねた若き日のドーデーが、その家の年寄りの羊飼いかから南仏の諺を覚えてもらう場面がある。

中央に坐するは老牧者なり。星を仰ぎて中夜山上に守する渠（かれ）の習慣は自から渠をして沈黙ならめ、渠の語り出づるは稀なり。短き煙管をくはえつゝ、をりをり吐き出す方言ぞ奇怪なる。渠が語りし俗諺の中に余が記憶するものは、二つ三つあり…¹⁶。

¹⁴ 戸川秋骨「プロヴァンスの戀歌」、『文學界』第51号、明治30年3月、2頁。戸川は上田敏と共にイタリア語を学んだ仲間の一人であった。

¹⁵ 同上、3頁。

¹⁶ 「ドーデーの逸事 其六 風車小屋」、『國民之友』第20巻第341号、明治30年3月、34頁。「ドーデーの逸事」という題名からは分りにくいが、『巴里の三十年』の抄訳で

ここで老人が口にする“奇怪なる方言”こそ、「今は其の跡を止めざる」はずのプロヴァンス語、上田敏の「訃音」に取り上げられた詩人アンセルム・マチウが詩作に用いていたプロヴァンス語なのであった¹⁷。

さて上田敏はその後も『帝國文學』や『國民之友』を舞台に盛んにダンテ論を展開していたが、やがてそれらを集めて加筆訂正を加え、『詩聖ダンテ』という一冊の研究書にして出版した。これが1901年の暮れのことで、最初の論文発表以来、実に6年の歳月を費やした力作であった。それとほぼ同時に、やはりそれまでに『帝國文學』の「海外騒壇」欄に発表してきた文章を集めて、『最近海外文學』と題して刊行したが、アンセルム・マチウの「訃音」もこの本に収録された。

その際、上田は初出の「プロヴァンス」を「プロヴンス」に、「マチウ」を「マティウ」に変えるなど表記に手を入れた他に、「精緻の研究に従はむとする人の為、参照の書籍をあげた」（序文）次のような補遺を付した。

新プロヴンス文學の研究者は Böhmer – Die provenzalische Poesie der Gegenwart, 1870. M. v. Szeliski – Die Litteratur der Neu provenzalischen (“Gegenwart” 1876, Nr. 35 fg.) を参照すべし。十九世紀初年に至て南佛蘭西の詩文急に勃興し、方言の詩人輩出せるを Jacques Jasmin († 1864) José Roumanille, Theodor Aubanel, Marquis de la Fare-Alais, Frédéric Mistral 等とす。是等奔馳の騷人相率みて Félibres の詩社を組み、以て南歐の新聲を唱へり。千八百三十年九月八日 Bouches-du-Rhône の Maillane に生れたる ミストラル は千八百五十八年 Mirèio の詩を アゼニオン に上梓し、翌年佛譯を添へ巴里に發布したるより名聲頓に高く、爾後 Calendau (1867), Lis Isclo d’Orof[sic] (1875), Nerto (1883), Le Poème du Rhône (1897) 等の作あり¹⁸。

1895年の段階では「詩社を組みしもの初め七星」と漠然としか言及されていなかったフェリブリージュについて、今回は具体的に多くの詩人の名を挙げ、団体名も「Félibresの詩社」と明記してある。特にミストラルについては簡単な伝記も付され、主要作品もほぼ網羅されている。厳密に言えば、ここに挙げられた詩人の中にはフェリーブルの仲間ではない人物も含まれている

ある。この記事には署名がないが、一説によれば田山花袋から英訳を借りた国木田独歩 (1871-1908) の翻訳だという。この点に関しては、山川篤『花袋・フローベール・モーパッサン』、駿河台出版社、1993年、101頁を参照。

¹⁷ なおドーデ自身は『巴里の三十年』において「奇怪な」という形容詞を用いてはいない。フランス語原文は「響きのよいお国言葉 patois sonore」、英訳もほぼ直訳で sonorous dialect となっており、どこから訳文の形容が生じたのかは不明である。

¹⁸ 上田敏『最近海外文學』、文友館、1905年、26頁。

が (Jasmin, Marquis de la Fare-Alais の 2 人)、そうした細かい点はともかく、20 世紀初頭に書かれたこの「補遺」が、ミストラル、オーバネルといった主立ったフェリーブルたちを日本に紹介した最初の文章である。

マチウの死から 6 年経って、上田敏は近代プロヴァンス文学についての新たな知識を伝えたわけだが、これは一貫して続けてきたダンテ研究を通じての中世プロヴァンス文学への興味に加え、さらにもう一つの要素がきっかけを与えたのではないと思われる。それはこの年最初の授賞が行われたノーベル賞であり、その文学賞候補の一人としてミストラルの名が挙がっていたことである。

上田がこの「補遺」で挙げている参考文献が 2 つともドイツ語のものであることから、彼が執筆の際参照したのはドイツの百科事典の類ではないかと推測されている。しかしフランス語を解した上田がフランス国内の文学運動について調べるとき、なぜわざわざドイツ語辞典を引く必要があったのだろうか。それはドイツの新聞・雑誌等でミストラル関連の記事を読んだためか、あるいは英語雑誌の他誌紹介欄などでドイツ系の記事の要約を見たためか、このいずれかの可能性が高いだろうと考えられる。

事実、ミストラル書誌を調べてみると、1900 年前後にはドイツ人研究者の手に成るミストラル関連記事が非常に目立つ。このプロヴァンスの詩人にノーベル賞を与えるよう強力に運動を行ったのは、フランスではなくむしろ隣国ドイツであった。フランス国内では時に分離主義の非難を受けたフェリーブリージュの運動であるが、ドイツでは当初から好意的に受止められていた。そこにはフランスを分裂させて国力を弱めることで、自国の利益に資する政治的意図があったとも言われるが、少なくとも表向きはドイツの学者たちはプロヴァンスの詩人たちの友だったのである。

結局初年のノーベル文学賞はシュリー＝プリュドムに与えられたが、ともかくもこの年、近代プロヴァンス語文学復興運動フェリーブリージュ (『Félibres の詩社』) の名は上田敏によって日本に紹介された。

ところでまさに同じ頃 (1901 年 10 月)、イギリスの雑誌『クォーターリー・レビュー』に「近代のトルバドゥール」という記事が載った¹⁹。筆者はイギリスの評論家ウィリアム・シャープ (1855-1905) である。トルバドゥール、という言葉だけでもこの文章は上田敏の注意を引いたであろうが、この場合には書き手もまた彼には馴染み深い人物であった。1895 年 1 月の『帝國文學』

¹⁹ William Sharp, "The Modern Troubadours", *The Quarterly Review*, Vol. 194, N° 388, october 1901, p. 474-505.

創刊号に載せた評論「白耳義（ベルギー）文学」を書く際に上田が参考にしたのが、やはりシャープの雑誌論文だったのである。

この「近代のトルバドゥール」は、フェリブリージュの初期同人及び次世代の主な詩人達を紹介したものだが、様々な作品からの豊富な引用がある点で、通り一遍の紹介記事とは一線を画している。本文中の引用はすべてプロヴァンス語原文、フランス語訳は省略されて、そのかわり欄外に注として英訳が添えてある。かつて上田敏が“接吻詩家”として紹介したマチウの詩からは「そなたの唇の野の薔薇に 接吻すれど茨のみ…²⁰」といった、いかにも綽名にふさわしい数行などが引かれている。

すでにマチウの死を報じ、その記事を単行本に収める際フェリブリージュについて若干の補足をも加えていた上田敏は、名前しか知らなかったこれら近代のプロヴァンス語詩人たちの作品に、部分的にとはいえ、やっと接することができたわけである。研究熱心なこの学者はシャープの記事に引用されていた彼等の作品の断片を自分のノートに写し取り、やがてそのうちの3編を彼一流の翻訳によって世に送ることになる。

さて3年後の1904年12月、以前から取り沙汰されていたミストラルのノーベル賞受賞がついに実現する。スペインの作家ホセ・エチェガライとの同時受賞であった。このニュースは日本でも翌年の3月、外国誌の記事の翻訳という形で、『太陽』誌上において紹介された。

今年の文學界に於いて、ノベル氏の奨励金四千万弗の總額は、佛國プロバンス派の詩人フレデリック、ミストラル氏及び西班牙の劇詩人エチェガレー氏との間に分かれたり。世界の論壇は、公平なる配分法なりと信ずる者の如し。

ミストラル氏は本年七十五才の高齡にて、プロバンス派詩人の泰斗なり。五十年前にラマルチン氏が、『大なる叙事詩人生れたり、これ眞に當代のホーマーなり、ペトラルクスのイタリー語を作りしか如く、方言より言語を作りしは此の詩人なり』と稱賛したるは、此の老詩人の事なりと²¹。

この記事は無署名で誰の筆になるものか不明であるが、文体や「プロバンス」という表記から見て明らかに上田敏のものではない。ミストラルが世界的な賞を得たことで、日本でもようやく上田以外の人物による紹介が現れ、近代プロヴァンス文学にわずかながら光があたり始めたのである。

²⁰ *Ibid.*, p.492.

²¹ 「文學上の懸賞」、『太陽』第11巻第4号、明治38年3月、223頁。もとの記事は「インデペンデント誌」から取られたとの注記がある。

しかしそれとは反比例するように、フェリブリージュの活動は次第に力を弱めつつあった。運動の中心であるミストラルこそ、老いたりといえどもいまだ健在であったが、この年（1905年）5月には初期同人アルフォンス・タヴァンが死亡し、ついに詩社を組んだ“七星”のうち6人までが姿を消したのである。

3

ミストラルのノーベル賞受賞とタヴァンの死、フェリブリージュをめぐるこの2つの動きが続いたまさにその時期、上田敏は『明星』誌上でフランス象徴派を中心とした詩の翻訳に集中的に取り組んでいた。この1905年の1月から10月までの間に約30編の詩が一気に呵成に訳出されたが、その仕事がほぼ終りに近付いた9月、ボードレールの「破鐘（やれがね）」やマラルメの「嗟嘆（といき）」などと並んで、次のような3つの短詩が掲載された。

白楊（はくやう）
落日の光にもゆる、
白楊の聳やく並木、
谷隈（たにくま）になにか見る、
風そよぐ梢より

海のあなたの
海のあなたの遙けき國へ、
いつも夢路の波枕、
波の枕のなくなぞ、
こがれ憧れわたるかな、
海のあなたの遙けき國へ。

故國
小鳥にさへも巢はあるを、
まして、青空よ、わが國よ、
うまれの里の波羅韋増雲（ばらいそう）²²。

出典はいずれも「(オオバ子ル——『詩集』)」と記されているが、実はこの

²² 『明星』、巳年第9号、明治38年9月、13-14頁。原典ではすべての漢字にルビが振ってあるが、ここでは煩を避けて最小限を示すに止めた。

3つの詩編こそ、1901年のシャープ論文「近代のトルバドゥール」から写し取られたものであった²³。すなわち英訳の付された引用部からの訳で、むしろ英語からの重訳というべきものだったが、ともあれこれが記念すべき本邦初の近代プロヴァンス文学の翻訳である。

上田敏はこれらの詩を9月の『明星』に載せた後、「故國」の「小鳥にさへも巢はあるを / まして青空よ、わが國よ」を「小鳥でさへも巢は戀し / まして青空、わが國よ」とするなどの推敲を加え、順序も「白楊—故國—海のあなたの」と改めた上で、10月出版の訳詩集『海潮音』に収録した。この詩集に収められているのは主として高踏派および象徴派の作品であるが、後者を選択したのは文学の新しい潮流を紹介する必要性を認めた結果であり、必ずしも訳者自身の好みに従った結果ではなかったことが序文には記されている。そして、驚くなかれ、上田敏が象徴派よりも心を寄せる詩人として、同じ序文中にオーパネルの名も挙げられているのである。

マラルメ、ヰルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオパネルの詩に注げり²⁴。

上田敏がシャープ論文中の数ある引用のうちから、フェリブリージュ随一の詩人とされるミストラルの作をも差し置いて、この3編を選んだだけでも不思議といえば不思議なのだが、さらにこのように名指しで共感を示すことまでしている理由は何だったのだろうか。

ひとつ手掛かりになるのは、翌1906年に慶應大学で行った民謡に関する講演である。このとき上田は、数日前から風邪で書齋にこもっていたところ、外から長唄の稽古の声が聞こえ、それに続いて子供たちの歌う「螢の光」や「故郷」が聞こえたことから「民謡」という演題を思いついた、と話を始めている。長唄は日本古来の声調を伝え、「螢の光」「故郷」はもともとスコットランドの民謡で、ケルト民族の旋律を伝えているものだが、自分は元来このような民謡調を非常に好むのだと彼は言う。

こう語りおこしておいて、あとは芸術あるいは詩の発生について、民謡研究の重要性についてなど自在に話を進めていくのだが、やがて元禄時代に

²³ この3編の詩の出典は島田謹二の研究によって明らかにされた。詳しくは島田『日本における外国文学』上巻、朝日新聞社、1975年、311-320頁を参照。

²⁴ 「海潮音序」、『上田敏全訳詩集』、岩波文庫、1962年、13頁。

まとめられた歌謡集『松の葉』に言及し、そこから「鳥も通はぬ山なれど、住めば都よ我里よ」という歌を例として引く。そして、ここで突然オーバネルへの言及が現れるのである。いわく、「鳥も通はぬ…」は平凡なようだが、実は同様の内容がプロヴァンスの文学にもある。「オオバネルと云ふ詩人は、是と同じ事を云て居」て、しかも文学者として称讃されている、というのである²⁵。上田敏の念頭にあったのは、おそらく「小鳥でさへも…」と始まる「故國」の詩であろうが、この講演での言及の仕方を見る限り、この作品にどこか日本の民謡に通ずる情緒豊かな響きがあると感じたことが魅力の一因だったらしい。

ウィリアム・シャープも「白楊」「海のあなたの」の2編についての前置で、「オーバネルの作品は、音楽と美と感情から成っている」と述べ、特に後者には「どこかケルト音楽のリズムを思わせる」ものがあると書くなど、その音楽性を強調している²⁶。ケルトといえば実はシャープ自身、評論家としての活動をする一方、「フィオナ・マクラウド」の筆名でスコットランドのケルティック・リバイバルの作家として活躍した人物であり、そのためか“プロヴァンス・ルネッサンス”の中心たるフェリブリージュの運動に寄せる関心も強かったようである²⁷。

さて、上田はすでに1904年1月、『帝國文學』に発表した「樂話」において、日本音楽発展の基礎作業として民謡楽蒐集の重要性を説いていたが、その一例として「例へば、我が邦のケルト人種ともいふべきアイヌの旋行（メロディ）かもしれぬ追分節の如きもの²⁸」を挙げている。この譬えが妥当かどうかはさておき、上田が『海潮音』以前、かなり早くから民謡など古い音楽に関心を抱いていたことは確かで、その結果「近代のトルバドゥール」の中で唯一“ケルト的”と形容されていたオーバネルの詩に興味を引かれたのではないかとも考えられる。

実際、上田は近代文学の中に見られる民謡的な要素をことのほか好んだ。後の1915年に彼は編著書『小唄』の序文で、小唄は民謡の趣味を保存している所に価値があるが、「歐洲の詩文を愛誦する者には此の類の詩が殊に面白

²⁵ 「民謡」（講演の筆記録）、『慶應義塾學報』第115号、明治40年3月、26頁。

²⁶ Sharp, art. cit., p. 504.

²⁷ 作家としてのシャープの活動については、フィオナ・マクラウド著、荒俣宏訳『ケルト民謡集』、筑摩書房、ちくま文庫、1991年に解説がある。またシャープと南仏の文学者たちとの交流については、Elizabeth A. Sharp, *William Sharp (Fiona Macleod), A memoir*, London, W. Heinemann, 1912, 2 vol. 参照。

²⁸ 「樂話」、『帝國文學』第10巻第1号、明治37年1月、53頁。

い。希臘羅馬の大雅も實は養ひを南歐の民謡に受けてゐた」と述べ、さらに「近代の詩人が歌つた民謡調、現代の詩壇に清風一過の趣ある俗歌體は可憐にして、而も往々痛切の感を與へる」として、自ら訳したポール・フォールの詩「別離」（「せめてなごりのくちづけを濱へ出てみて送りませう…」）と越後甚句の「見送りましよとて濱まで出たが、泣けてさらばが言へなんだ」との親近性を指摘している²⁹。ここではオーパネルの例は挙げられていないが、上で紹介した民謡論の講演と照らし合わせてみれば、言わんとしている内容は同じだと合点がゆくだろう。

「螢の光」のメロディの故郷・スコットランドの作家が、南欧プロヴァンスの詩人の作品にケルトの旋律を見出し、それをまた民謡を愛し南欧を愛する日本の学者が見出して共感する。『海潮音』に収められた3編のプロヴァンスの詩は、このような幸福な出会いの連鎖の結果、日本の文学界にもたらされた。アンセルム・マチウの死から10年、かつては輪郭しか伝えられなかったプロヴァンス文学は、ついに実体をそなえて姿を現したのであった。

4

さて『海潮音』に「白楊」「故國」「海のあなたの」の3つの詩を収めた上田敏は、まず序文冒頭で「巻中収むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し³⁰」と記してプロヴァンスの詩人の存在に触れ、さらに作品の後注として次のような解説を加えた。

オオパネルは、ミストラル、ルウマニユ等と相結で、十九世紀の前半に近代プロヴンス語を文藝に用ゐる、南歐の地を風靡したるフェリイブル詩社の翹楚なり。「故國」の譯に波羅葦増雲（バライソウ）とあるは、文録慶長年間、葡萄牙語

²⁹ 「『小唄』序言」、『定本上田敏全集』第9巻、1979年、402頁。

³⁰ 『上田敏全訳詩集』、13頁。上田敏はベルギーの詩人2人（ヴェルハーレン、ローデンバッハ）をフランス詩人に数える一方、オーパネルを“プロヴンスの詩人”としてフランスとは区別していた。プロヴァンスに関しては、文学的伝統ある地に敬意を表しての別格扱いとも見えるが、ベルギーの例と合わせて考えると、むしろ言語に基づく分類かと考えられる。ちなみに『近代文学研究叢書』第16巻、昭和女子大学近代文学研究室、1961年、258頁には、「国別にすると、[...]プロヴンス一人（三篇）、ベルギー二人（七篇）、フランスでは十二人、二十四篇」云々とある。プロヴァンスの扱いは相変わらず微妙なようである。

より轉じて一時、わが日本語化したる基督教法に所謂天國の意なり³¹。

『最近海外文學』の注とは違い、今回は正確にフェリブリージュの3巨頭の名のみが挙げられている。基本的には簡潔にして要を得た紹介といえるが、詩社が結成されたのは1854年であるから「十九世紀の前半に」とある部分は「半ば以降」とでも訂正しなければならない。これは参照した文献が誤っていたのか、上田の勘違いか不明だが、いずれにせよたいした問題ではない。後半の“波羅葦増雲”についての解説は、あくまでも訳語の注であるから、上田が独自に書き足したものであろう。

ところでオーパネル作として紹介された3編の詩のうち、最も好評を博したのは「故國」であった。「鳥も通はぬ山なれど…」に通じる民謡調が馴染みややすかったこともあるが、注でも言及されていた「波羅葦増雲（パライソウ）」という語に表れた南蛮趣味が好まれたこともあった。

そのいい例が木下杢太郎（1885-1945）の場合で、彼はキリシタン迫害を扱った戯曲『繪踏（長崎殉教奇談）』（1913年執筆）に「故國」の引用を取り入れている。愛欲ゆえに殺人の罪を犯した侍が、精神の安らぎを求め、キリスト教に心引かれて長崎にやってくる。彼はそこで異形の僧に会い、伴天連が磔にされた昔の物語を聞くことになるのだが、この侍をキリシタン殉教の地へと導くのが「故國」の詩なのである。彼は序幕第一場、「小鳥でさへも巢は戀し…」と口ずさみつつ舞台上に登場する。そして、なぜこの場所へやってきたのかを独白で一通り語り終えると、再び同じ詩を口にする。

その時ふとわしの心に湧いた泉がある。子供のときに根を張つた知らない世界へのあくがれぢや。武勇の譽も、世の榮華も打ち棄てて、心の國を建つる爲に血を流した昔の聖人たちの物語を思ひ出したのぢや。

小鳥でさへも巢は戀し。

まして宵空、わが國よ。

うまれの里の波羅葦増雲（パライソウ）。

日を幾日、月を幾月、思ひこがれた長崎の港ももう目の下ぢや³²。

これは別の文学作品に引用された珍しい例だが、翻訳詩の選集に載せられる場合にもまた「故國」のみが採用されていることがある。たとえば1919

³¹ 『上田敏全訳詩集』、127頁。「パライソウ」の「イ」の字は表記が揺れているが、『明星』の訳文、及び『海潮音』初版の解説にある「波羅葦増雲」が正しいようである。

³² 木下杢太郎「繪踏」、『南蛮寺門前』、春陽堂、1914年、66-67頁。

年に詩人の生田春月（1892-1930）によって編まれた『泰西名詩名譯集』などがそれで、ここでは「海のあなたの」「白楊」の2編は割愛されている。巻末に添えられたオーバネルの略伝は、大筋において『海潮音』の注をなぞっているが、後半の“波羅葦増雲”に関する記述を省略し、かわりにプロヴァンスという土地に関する解説を加えているところが、南蛮趣味の色濃い木下柰太郎の例とは対照的である。

オオバネル (Aubanel) 大詩人ミストラル及びルマニユ等と共にフェリイブル詩社を結び、近代プロヴァンス語を用いて詩作す。プロヴァンスは南佛の一地方にして、昔日トルバドル詩人の輩出せる土地である³³。

以上の2つは大正時代の例であったが、昭和に入っても「故國」は“オオバネル作”の3つの詩の中で、さらには『海潮音』全体の中でも、特に高い評価を保ち続けた。たとえば1929年に、北原白秋（1885-1942）はこの詩を、カール・ブッセの「山のあなた」やウィルヘルム・アーレントの「おすれなぐさ」と共に「小抒情短曲の寶玉」に数えているし³⁴、さらに数年後（1935年）には「抒情小曲としては集中でも屈指の名譯と目せられ、多くの讀者の愛誦するところとなつて、今日は殆ど日本新詩の一小古典のうちにさへ數へられる」とする評者も現れる³⁵。

“古典”となった「故國」の人気は戦後になっても衰えず、オーバネルについて語る文章では、まるで枕詞のようにこの詩が引かれているのを見ることが出来る。「Aubanel につい[て]思い出されるのは、彼が上田敏の譯詩『小鳥でさへも巢は戀し』の原作者であることである³⁶」（1951年）、あるいは「上田敏の名譯詩集『海潮音』を讀んだことがあれば、『小鳥でさえも巢は戀ひし…』の第一行をもつ詩を記憶している人は、相當に多いことと思う³⁷」（1958年）といった具合である。

³³ 生田春月編『泰西名詩名譯集』、越山堂出版、1919年、276頁。なお生田は序文でこの訳詩集が134人にも及ぶ詩人の作品を収めていることを誇らしげに記し、「之を國別にすれば英米に三十五人、佛白に二十五人、プロンヴス[ママ]に一人…」と『海潮音』のそれとよく似た統計を示しているが、「國別」と言いつつ“英米”“佛白”をまとめ、一方でプロヴァンスを単独で扱うなど、上田式“言語別”分類を踏襲している。

³⁴ 北原白秋「明治大正詩史概観」、『現代日本文学全集』第37巻、改造社、1929年、551頁。北原白秋は、『繪踏』の著者・木下柰太郎の友人。

³⁵ 島田謹二「小鳥でさへも巢は戀し」、『文化』第2巻（東北帝大）、1935年、67頁。

³⁶ 中原俊夫「Félibrige 概観」、『フランス語研究』、第3号、フランス語学会編、1951年、25頁。

³⁷ 高橋邦太郎「オーバネルの家を訪う」、『学燈』第55巻第3号、1958年、22頁。

しかしこの詩が及ぼした影響力の強さを最もよく示しているのは、近代プロヴァンス文学研究者・杉富士雄（1921-1991）の出現であろう。杉は東京大学仏文科在学中の1946年、「当時、大学の図書館にはオーバネルの詩集は一冊もなかった³⁸」という困難な状況のなかで、この詩人の研究を始めた。その成果はやがて『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』（1960年）の一書に結実するが、後に記しているところによると、杉がこの研究を志したそもそものきっかけは、まさに上田敏訳の「故國」だったというのである³⁹。作品を見つけることも容易ではない詩人の研究を決意させたのであるから、『海潮音』の訳詩の力はまったく偉大だったといえよう。

マチウの訃報から始まった日本と近代プロヴァンス文学との出会いは、「小鳥でさへも巢は戀し」の民謡調の名文句のおかげで、ついには本格的な研究を生み出すまでになった。これはひとえに上田敏の功績である。彼は、一人また一人と創設時のメンバーを失いながらなおも輝きを放っていたフェリブリージュと同じ時代を生き、外国の新聞や雑誌に載っている限られた情報からその動向を読み取った。のみならず、その作品を優れた翻訳によって示し、みごとに日本の風土に移植した。海のあなたの遥かなる詩人の国は、上田のおかげで憧れつつ渡りゆくことのできる土地となったのである。

結び

フェリブリージュの初期同人アンセルム・マチウの死から、ミストラルのノーベル賞受賞を挟んで、もう一人の同人アルフォンス・タヴァンの死まで、すなわち1895年から1905年までの10年間に、日本で行われた近代プロヴァンス文学紹介の道筋をたどってみたが、この時期移入の中心となっていたのは常に上田敏であった。フランス国内の文学運動を扱っていながら、紹介はドイツ系の文献経由、翻訳はイギリス誌の英訳経由と、迂路を通っての作業であったが、これは限られた情報を最大限に活用した上田敏の優れた力量を示すものであり、また南仏文学復興運動が本国よりもむしろ国外から関心を寄せられていたという事実の証左でもある。

さて、明治時代に上田敏が始めた近代プロヴァンス文学紹介は、彼の訳詩「故國」に魅了された文学者・杉富士雄によって受け継がれ、1960年には詩

³⁸ 杉富士雄『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』、大修館書店、1960年、359頁。

³⁹ 杉富士雄訳・著『ミストラル「青春の思い出」とその研究』、福武書店、1984年、「あとがき」、805頁。この本の第12章、267-276頁に「故國」の原詩の全訳がある。

人オーバネルに関する日本初の本格的な研究書が出版されることになるが、研究を進めるうちに、杉はひとつの疑問に行き当たった。上田敏が訳した「オオバネル作」の3つの短詩のうち、「海のあなたの」「白楊」の2編は抒情詩集『笑み割るの柘榴⁴⁰』(1866)に原詩が確認されたが、「故國」についてはオーバネルの作品集に原典を見出すことができなかったのである。研究論文を調べても、この詩がオーバネルの作だと断定したものは、上田が参照したシャープの「近代のトルバドゥール」以外には見つからない。はたして「故國」は本当にオーバネルの作品だったのであろうか。

実はシャープが論文の中で引用していたのは、もともと「フェリーブルの歌」と題された130行から成る詩の一部であった⁴¹。1854年にフェリブリージュが設立されたとき、今後はプロヴァンス語を用いてプロヴァンスを歌い、うるわしい故郷を顕揚していくのだという決意を表すために、同志たちの“マルセイエーズ”が作られた。それが「フェリーブルの歌」で、そこには若い詩人たちの抱負が、飾り気のない平明な言葉で素直に歌い込められている。上田が訳した3行を含む冒頭の一節を引いておこう。

我らは友よ、兄弟（はらから）よ、	Sian tout d'ami, sian tout de fraire,
我らは故郷の歌い手よ。	Sian li cantaire dóu païs !
子供はすべて母を恋い、	Tout enfantoun amo sa maire,
小鳥はすべて巢を慕う。	Tout auceloun amo soun nis :
この青空と、この土地は、	Noste cèu blu, noste terraire
我らにとっては天国よ ⁴² 。	Soun pèr nous-autre un paradís.

さて問題は作者だが、1855年の『プロヴァンス年鑑』掲載時に、この詩は1854年5月21日、フェリブリージュ創立の日に、同人の一人の家に集まった詩人たちによって作られた、という趣旨のことが記され、またミストラルの自叙伝にも「我々の『フェリーブルの歌』」とあるために、当時の同志たち

⁴⁰ Teodor Aubanel, *La Mióugrano entre-duberto* (La Grenade entr'ouverte) この第一詩集がオーバネルの代表作である。作品には他に、2つの詩集『アヴィニョンの娘たち *Li Fihò d'Avignoun* (Les Filles d'Avignon)』(1885)・『沈める太陽 *Lou Rèire-Soulèu* (Le Soleil d'outre-tombe)』(死後出版、1899)、及び3つの戯曲『罪のパン *Lou Pan dóu pècat* (Le Pain du péché)』(1882)・『牧人 *Lou Pastre* (Le Pâtre)』・『誘拐 *Lou Raubatòri* (Le Rapt)』(ともに死後出版、1935・1928)がある。

⁴¹ *Lou Cant di Felibre*, *Le Chant des Félibres* シャープがこの原題を示していないため、上田敏は翻訳時に、引用部の意を汲んで独自に「故國」の題を施したのである。

⁴² *Armana provençau* (Almanach provençal), 1855, p. 19. 『プロヴァンス年鑑』は暦を兼ねたフェリブリージュの機関誌で、全編プロヴァンス語で書かれている。

が共同で作ったものと考えられていた⁴³。ところが1966年、フランスの研究者ピエール・ロレ(1925-)が、この詩の作者は他ならぬミストラルだという説を提出し、自ら校定を手掛けたミストラル全集に「フェリーブルの歌」を収録、従来の共同制作説を真向から否定したのである。

ロレのミストラル創作説は、1854年にルマニユーがミストラルに宛てた書簡で「この歌はとても美しい。[...]今晚にでも、我々の同志の大作作曲家ドーに、このマルセイエーズに欠かせない伴奏を作ってくれるよう頼みに行く」と書いていることを主たる根拠としている⁴⁴。つまりミストラルが自作の詩をルマニユーに送り、その出来栄えに満足したルマニユーが採用を決定したというのが「フェリーブルの歌」成立の真相であって、この詩がすべての初期同人の理想を代表しているのは事実だとしても、実際の創作に関与したのはミストラル一人に違いないというのである。

杉富士雄はこの説を検証し、自らも新たな推論を加えて補強した上で、上田敏の訳詩「故國」の作者をオーバネルからミストラルに訂正すべきだとする論文を発表した。オーバネル研究に一応の区切りをつけて、ミストラル研究に手を染めていた1978年のことである⁴⁵。「小鳥でさへも巢は戀し」の詩句に導かれてその作者オーバネルの研究に従ったはずの杉が、実はそれがミストラル作だったという事実にとどり着き、その結果、「故國」を含む3編を訳した上田敏が、自分でも知らない間に「プロヴァンスに二人」の詩人の作品を紹介していたことを明らかにしたのであった。

日本における近代プロヴァンス文学紹介は、このように相当早い時期から、上田敏によってオーバネル、そしてミストラルという代表的な作家2人の作品が翻訳されるなど、順調な滑り出しを見せたわけだが、上田に続く有力な紹介者はなかなか現れず、その後の進展は捗々しくなかった。プロヴァンスに再び光があたり始めるのは約10年後、今度は森鷗外(1862-1922)が最後の初期同人・ミストラルの訃報を伝える頃からである。この時期の近代プロヴァンス文学紹介については、稿を改めて書くことにしたい。

⁴³ *Ibid.*, p. 23. ; Frédéric Mistral, *Moun Espelido. Memòri et raconte* (Mes Origines. Mémoires et récits), Raphèle-lès-Arles, C. P. M. Marcel Petit, 1981, p. 452. 引用部、傍点筆者。

⁴⁴ Frédéric Mistral, *Poésies inédites*, C. P. M., s. d., p. 463-464. Note de Pierre Rollet. このときドーが作った曲の楽譜は、1855年の『プロヴァンス年鑑』巻末に掲載されている。

⁴⁵ 杉富士雄「『海潮音』と南仏詩人オーバネル」、『文学』第46巻10月号、1978年。杉はこの論文の「付記」で、『海潮音』を含む『定本 上田敏全集』第一巻の刊行を報じているが、「故國」の原作者に関する杉の研究は僅差で間に合わず、『定本』の注にはその成果は取り入れられなかった。なお1977年には、ミストラル作・杉富士雄訳『プロヴァンスの少女 ミレイユ』が岩波文庫に入っている。